

2018年10月28日 川越教会

## 背負われて生きる

丸山 勉

【聖書】 イザヤ書 46 編 1～6 節

ベルはかがみ込み、ネボは倒れ伏す。彼らの像は獣や家畜に負わされ  
お前たちの担いでいたものは重荷となって

疲れた動物に負わされる。

彼らも共にかがみ込み、倒れ伏す。その重荷を救い出すことはできず

彼ら自身も捕らわれて行く。

わたしに聞け、ヤコブの家よ

イスラエルの家の残りの者よ、共に。あなたたちは生まれた時から負われ  
胎を出した時から担われてきた。

同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで 白髪になるまで、背負って行こう。

わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。

【序】 永眠者記念礼拝—思い出ではなく、今、神様を礼拝する

今日は「永眠者記念礼拝」をご一緒に捧げています。

あとで皆さんで歌いたいと思って選ばせて頂いた讃美歌は、550番の「ひとたびは死にし身も」です。この歌を愛唱歌にされている方は多いのではないのでしょうか。私もとても好きな讃美歌です。歌詞を少しご紹介するところになっています。

「ひとたびは死にし身も 主によりて いま生きぬ。

みさかえの かがやきに つみの雲 きえにけり。

(くりかえし)

ひるとなく、よるとなく、主の愛に まもられて。

いつか主にむすばれつ、世にはなき まじわりよ。」

この讃美歌は、神様に結ばれて生きる幸は、この世の中のどんな交わりにも優る交わりの幸だ、と歌っている讃美歌だと思いますが、私が特に心をとられる歌詞は、2節なのです。

「主のうけぬこころみも、主の知らぬ かなしみも うつし世に あらじかし、いずこにもみあと見ゆ。」—特に、「いずこにもみあと見ゆ」がいいなあ、と思うのです。

今日、週報に、永眠者の方々のお名前を記させて頂きました。今日はその皆様のご家族の方もおられますね。永眠者の方は、皆それぞれに与えられた人生の道のりを、その長さもそれぞれに歩み、既に主のみ許に召された方々です。全員の方を直接知っている方は、何人いらっしゃるのでしょうか？—私自身は、昨年からの川越

教会に遣わされたばかりの者ですので、実は、永眠者の方の中では、この9月に召されたばかりの小山京子さん以外、一緒に教会でお目にかかること出来た方はいないのです。そういう意味では、私はここに立つ資格があるのだろうか、と少し思っていますが、けれども、私たちは今日、生前の思い出話をするために集まっているのではなく、**神様を礼拝するために集められていることを改めて思うのです。**

それは、お一人ひとりの人生を見てもみます時に、**そこには確かに、まことの神様のお導きと支えがあったことを覚えることが出来るということ、**それこそ、讚美歌で「**いずこにもみあと見ゆ**」と歌われているように、私たちの目を、**その方々の生涯の中に刻まれている、神様の御手や、御足の跡を見るように**と促されているように思います。

そして、このことが大切だと思うことは、その方々を導き、関わり、生かしてこられた主なる神様が、**今ここで礼拝を捧げている私たち一人ひとりにも同じように出会い、関わっていて下さる**ことを心に刻む時であると思うのです。

#### [1] 菊地敏明さんの証し

私はこの度、既に召された方のプロフィールやそのお証しの文章に触れる機会がありました。執事の方が、この新任の丸山は以前の教会員の方を知らないので、少しでも知ってもらいたい、ということもあったと思いますが、その証し集を読ませて頂いて、本当に、**それぞれに神様との異なる出会いと導きがあったのだなあ、**神様は素晴らしいなあ、と思わされたのです。

その中でお一人、私が今回初めて知った**菊地敏明さんの信仰**のことを少し分ち合わせて頂くことをお許し下さい。菊地さんは、2009年の10月に73才で召されました。その前の年に自らの半生を振り返って、週報のコラムに二度にわたってお証しを書いてくれたのです。——菊地さんは、敗戦を、今の**中国の瀋陽(しんよう)**で迎えたのですが、当時まだ続いていた略奪や暴力、殺人を目の当たりにし、少年だった菊地さんの**心に深い問い**を投げかけたのです。このように記しています。

「どんなに努力して積み上げても一瞬にしてゼロになる。**人生の無常**を身にしみて感じました。**人間なんのために生きているのか?**という思いが頭をよぎるともう駄目、何も手につきません。自分で選ぶ人生なんかもう沢山だ。自殺や死刑はいやだが、終身刑で刑務所の独房に入っていたいと願いました。通り魔殺人の心境は最近の現象ではなくて、50数年前の**17歳の私の心境**でもありました。

**何を信じて生きていけばいいのでしょうか。**世界文学、哲学、心理学等の本を読み漁りましたが、心は癒されません。聴覚、視覚、味覚に美しいと感じる心だけは残っていただけだったので、美しい音楽、絵、そして美味しい食物で心が癒されました。

大学が**青山学院**でしたので、**聖書購読が必修**でした。**ヨブ記**を繰り返し読み、神

と格闘しましたが、信仰のない者にとっては単に知的作業でしかありませんでした。しかし、読書でいつも引っかかるのはキリスト教です。教会に飛び込んで、神を信じている人をこの目で確かめることにしました。確かに、イエスは魅力ある人物です。先ず史的イエスを私なりに追求しました。

しかし、イエスはキリストなのだということが、ある日突然、私を捉えたのです。どうしてか理由もなく心から涙が溢れ出てきました。ああ、イエスこそキリスト、神なのだ。イエス抜きには神と直接交わろうとどんなにあがいても神を認識できないし、神と和解しない。イエスという具体的な人格を通して、神は血の通ったお方として交わってください。イエスをキリストと告白することによって、本当の平安が与えられました。神と私とが和解したのです。魂の底から慰められ、癒されました。もう人生に不安も虚無感もありません。何もかも感謝、恵み。

それから、白い紙に墨をつけた筆で聖書の言葉を書きました。芸術では飯を食えないのでいろいろな職業につきました。フリーターのはしりでしょう。でも、心が定まれば人生は楽です。嬉しくてしょうがない。聖書は真実です。その通りを受け入れたら、その通りになります。何の思い煩いもありません。いつ召されても、人生を全うした、ありがとうと言って死ねるかなと思っています。」

そして、これを書かれた翌年に、菊地さんは、心筋梗塞で急逝されたのです。今、この礼拝堂には、書道の師範でもあった菊地さんによる筆で、詩編 133 編 1 節「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」の聖句が掲げられ、私たちに神様の祝福を運んでくれています。

## [2] 「わたしに聞け。わたしはあなたたちを造った」

私は、信仰というのは、リレーなのだなあ、ということを思います。クリスチャンホームだった方は、その親や祖父母の信仰を受け継いできた、という方も多いと思います。文字通り、リレーです。でも、それだけではなく、私たちは、教会で信仰に生きてきた先人たちが残してくれたものや生きざまに触れ、その信仰のいのちのバトンを受け継いでリレーすることが出来るのだと思うのです。

アウグスティヌスの言葉ではありませんが、私たちの心には、神様にしか埋めることが出来ない空洞があるのだと、私自身も思われます。先の菊地さんのお証しにもありましたように、まことの神様との出会いを経験して、心が定まるのだと思います。「嬉しくてしょうがない。いつ召されても人生を全うしたと言える」と記しておられましたが、神様に捉えられるとはそういうことなのではないでしょうか。

今日読んでいただいたイザヤ書の聖書の言葉ですが、これはすごいことを語ってくれている御言葉だと思います。これは、私たちの宗教心というものを根底からひっくり返す言葉だと言うことも出来ると思います。私たちは、人生の支えを欲して宗教を求めようとする人が多いと思いますが、ここで言われていることは、**そのあなたはもうとっくの昔から神様に支えられているのだよ、**ということだと思ふのです。

イザヤ書 46 章の 1～2 節ではこうあります。

「ベルはかがみ込み、ネボは倒れ伏す。彼らの像は獣や家畜に負わされ、お前たちの担いでいたものは重荷となって、疲れた動物に負わされる。彼らも共にかがみ込み、倒れ伏す。その重荷を救い出すことはできず、彼ら自身も捕らわれて行く。」

ベルとは、イスラエルを破ったバビロニアの神とされていた偶像で、ネボもその子供、とされています。国に勢いがあった時は良かったのですが、今はペルシアに攻めて来られて、皮肉にもそのベルやネボの像を、人間が家畜に乗せるように世話をしなくてはいけなくなってしまった。このような空しい神々に仕える者は、**実はあなたもその偶像と同じように倒れ伏してしまうのだよ、**と警告するのです。

そして、その上で、まことの神様はご自分で宣言される、と言うのです。「わたしに聞け、ヤコブの家よ イスラエルの家の残りの者よ、共に。あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出した時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで 白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」(46:3～4)

この箇所は、口語訳聖書ではもっとこの主語を強調していました。お聞き下さい。「生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」

この短い聖句の中に「わたしに」、「わたしは」とまるでくさびを打つように5回も強調して出てきます。神ご自身の主権と責任においてそれをするのだということです。「わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」と。神様が私たちを担って下さる理由はただ一つ。それは「わたしは造ったゆえ」だと。だから最後まであなたから目を離さない。いや、持ち運んでいく。そして、あなたを必ず救うのだ。見捨てることはない、と。私たちの存在は、この造り主あってこそその存在、初めから「土台」がある、ということです。けれども私たち自身が、その神様をいつしか捨ててしまったのです。そしてそのことにも気付かないで、空しくさ迷っていた私たちなのです。

### [3] 「わたしが担い、背負い、救い出す」

けれども、その人間を神様は放っておかれませんでした。現代のネボやベルのような力に誘われて空しい生き方をして欲しくない。そこで、**神ご自身が人となって下さったのです。イエス・キリスト**です。このお方は——私は本当にそう思うのですけれども——**ただ人間を背負うために、この世に来て下さったお方だ**と思います。先ほどのイザヤ書の言葉で、「わたしが担い、背負い、救い出す」という言葉がありましたけれども、それは新約の時代に入り、時至って、**御子イエス・キリストが私たちの只中に来て下さったことで、真実の出来事、まことの出来事となった**のではないのでしょうか？

私たちは、あのゴルゴタの丘に向かって、**自ら十字架を担いで、黙々とその足どりを進められた主イエスのお姿**が目に浮かんできます。何故このイエス様は鞭打たれ、茨の冠を被せられ、血を流しながらもご自分で十字架を背負われたのでしょうか？もしかしたら十字架の木は、丘の上に用意しておくことも出来たのではないのでしょうか？——けれどもそうではありませんでした。**ヨハネ福音書の 19 章 17 節**にこうあるのです。

「**イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」すなわちヘブライ語でゴルゴタという場所に向かわれた**」。

イエス様は、ご自分から十字架を背負われた、とあります。「ご自分から」です！この場合の十字架とは何でしょうか？——**私たち自身だ**、と私は思います。「**わたしが担い、背負い、救い出す**」と語ったイザヤ書の言葉がここで実現しているのではないのでしょうか？

それは、**神なしで生きてきた私たちが**、——それゆえ、もう自分の足では歩けなくなってしまっている私たちが——**今や、神様の独り子イエス様の背に担われて、神様の救いに与るべく、持ち運ばれているのです！**これは、神様がご用意下さった不思議で、愛に満ちた救いのご計画だったと、今私たちは信じる事が出来るのではないのでしょうか。

そして、このような事も思います。このような記念礼拝を持つ時に、既に召された方は、**今、復活の目覚めを待つ永眠の中**にいることを信じる信仰を新たにさせられますが、もしかすると、その先に送った方を思い起こす時、私たちは、ある種の罪責感や忸怩たる悔いのようなものが新しく起こってくる、ということはないのでしょうか。

「**もしもう少し長生きしてくれたならこう言いたかった**」とか、逆に「**何故、あのようなことを言い、してしまったのだろう**」というようなこと、です。肉親のような近い関係であればあるほど、心のどこかにこびりついて離れない後悔というものがあるのではな

いかと、自分自身のことを振り返っても思います。一けれども、そのような私たちの思いもまた、**十字架の主は担って下さっているのではない**でしょうか？

主は、「**わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。**」(ルカ 9:23)とおっしゃいましたけれども、信仰を持っていても私たちが日ごとに背負わなければならない人生の苦勞、痛み、悲しみといったものが、それを背負っている私たち自身を、実は主ご自身が背負って歩いて下さっているのだ、と 생각합니다。

主イエスは**私たちの弱さを誰よりも良く知っている**お方ですし、「**心安かれ、なんじの罪は赦されたり**」(マタイ 9:2 文語訳)と宣言して下さっているお方です。私たちは、罪赦された者として、心安んじて生きていって良いのですね。

### [結] 主に背負って頂きながら

そして、十字架の道というのは、滅びに至る道ではありません。**復活につながるいのちの道**です！その確かな道を、主イエスは身をもって開いて下さいました。

今、私たちは、そのことを喜んで礼拝しているわけです。**復活の主がいて下さるから**、既に召された者も、もう少しこの地上の生涯を歩む私たちも一つとされています。

与えられた**信仰というバトン**をリレーしながら、このいのちを、主に背負って頂きながら生きてゆきたいと 思います。先人の**信仰**に励まされながら。そして、「**いずこにもみあ**と見ゆ」、その主ご自身のご愛の大きさ、確かさに支えられながら。

お祈りをいたします。

主なる神様、この永眠者記念礼拝を感謝致します。

既にあなたのみ許に召された先人の信仰に私たちは励まされます。そこには、その一人びとりの人生を慈しみ、愛し、赦し、持ち運んで救って下さったあなたの大きなみわざがあったことを覚え、心から感謝申し上げます。

今、お一人びとりを生かした同じ主が、私たちと共にいて下さることを信じます。「**日々に我らの荷を負う主はほむべきかな**」と詩編にありますけれども、あなたに背負って頂きながら、しかし、あなたの赦される限り、この地上の生を感謝と讚美と、また、愛を持って歩むものとして導いてください。

この礼拝の交わりの中心にあなたがいて下さることを心から感謝し、救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。